栃木県中学校長会報

ある適応

栃木県中学校長会副会長
大和田　豊

私が洋蘭づくりを始めて25年はたっただろうか。

その魅力にひかれて，家の一部をサンルームにし，種種雑多を集めて育てた頃を思い出す。

蘭科は菊科に次いで豊富に種類があるが，その分布は熱帯から寒冷帯にも及ぶという。そのたくましい適応力には，賛嘆の他はない。また，その個性的なことも面白い。その花に，姿に，それぞれのパーソナリティーさえも感ずるのである。あまり目立たない地味な花には芳香を，小輪には無数の群舞を，命短きものには絢爛を，まさに天賦の妙である。

ところで，育て方が面白い。中学生を扱うのに似ている。例えば，地生蘭（シンピジウム等）や着生蘭（カトレア等）の自然の生活環境をよく知り，個の生育段階や状態にあわせて育てることである。肥料は成長のリズム，季節，種や個によって調節する。薄くして初夏から秋にかけて生育ざかりの地生蘭に与える。最初は過期待に誘発されて，やみくもに肥料をやり過ぎて失敗することが多い。五月頃から十月頃までは戸外で育てる。温室植物を外で育てるなんて？…… と思われるが日本の夏は高温多湿で彼女らのはるか故郷常夏の自然を偲ばせる。それに，陽光や風雨にさらした方が抵抗力がついてがっちりと育つ。過保護は禁物である。やがて十月ともなると，温室への取り込みを始めるが，ここが肝心なところである。デンドロ等は，水を控え目にして，下旬の取り込む直前では寒さに1・2回当てるのが花つきのこつとされている。この刺激の塩梅が難しく，気象情報に気を配り，絶えず注意深く観察をしなければならない。もし，この刺激が甘ければ花芽にならずに葉芽にとんでしまう。また，刺激がオーバーになれば枯死させて元も子もなくしてしまう。しかし，この苦労が洋蘭づくりの妙味でもあり，開花を見た時の喜びはたとえようがない。

生物界のメカニズムは実にデリケートである。そして，面白いのはこれらの温室植物がだんだんに強くなっていることである。かつて，加温してやったカトレアが1鉢無加温で育ち花をつけたのも馴化が出来たと言うべきだろうか。

さて，今や全国的に中学生の非行，校内暴力や登校拒否等が激増している。これらの要因については，多くは家庭の躾にありとされるが，学校での学業不適応，社会教育の立ち遅れ，ドラスティックな経済発展による歪み等もあげられる。実際にはそれらが絡みあい構造的でその波及性も未だかつて例を見ない。　学校は，自ら考え正しく判断できる力をどうつけさせるか，新教育課程の内容をいかに確保させるか，まさに絃絃相摩す日日である。　かつて，先人は子どもが学習強くなる方法として，「難書力読」と教えた。また，ゲーテは「知性は静けさの中で作られ，性格は激流の中で作られる」と述べた。「漫画漫読」や「詰込教育」では高い適応や豊かな人間性は育たないと先見したその慧眼には感服の他はない。

そこで，本校ではとくに努力点として，各教科での基本的な学習訓練，道徳教育による心情トレーニング，集団活動をとおして連帯感づくりと体力づくりをとりあげている。何分，欲求不満耐性が低く，弾性や可塑性に弱く，モラトリアム化が進んでいる今の中学生である。その適応は一進一退で日暮れて途遠しである。しかし，教師が使命に燃えて，ハードトレーニングとオーバートレーニングのはざまにかける厳しい勝負こそ，人間性陶冶の正念場である。そして，一人ひとりの子どもが自己の向上をめざして，目いっぱいの努力をするように進んだ時，ユニークな花を咲かせたと言える。それは，教師にとって，何物にもかえ難い喜びではないだろうか。

文部省より「児童生徒指導研究推進地域」の指定を受けて

芳賀地区児童生徒指導連絡協議会長　小　林　　茂

将来の社会を担う児童生徒の健全育成は，古今を問わず時代を越えて我々地域社会全体の責務であります。

しかしながら今日は，児童生徒にとって彼等が雄々しく自己実現を図るためには必ずしも望ましい環境であるとは申せません。本地区においても戦前は農村地帯でありましたが，近時急速な工業化，都市化現象へと進んで参りました。それに伴って，その近郊まで生活様式は一変し，住民の価値観や子どもの教育観も大きく変わり多様化の一途をたどっております。更に児童生徒の問題行動も年々増加してきている現状にあります。ここで児童生徒指導の在り方や対応の仕方についても検討を加え一段と研究を深めなければならない時期に来ております。

このような時に，芳賀地区が文部省より56・57年度生徒指導研究推進地域の指定を受けることになりました。ここに今日までの経緯と研究の方向やその概要について紹介させていただきます。

1.　文部省の研究指定の意図

一定地域内の学校，関係諸機関，地域社会の組織等と連携を図りつつ各学校の生徒指導の充実強化に資する。

2.　本県の受けとめ方

この研究推進地区の指定を受けるについては，全国県教育長会での文部省から趣旨説明があった際，県教委渡辺教育長は，これを率先して本県で実施することを要望し，実現するに至りました。

本県の教育行政基本方針の一つである生命尊重の教育を踏まえ，更に児童生徒の問題行動の低年令化の現状に鑑み，研究の対象として中学校，高等学校に小学校を含め，小中高校の一貫教育を重視し，一丸となって研究実践を進めることとする。

研究に当たっては，既存の組織を生かし，家庭地域社会との連携を深め，地域の教育力を一層向上させることに努める。

3.　研究主題

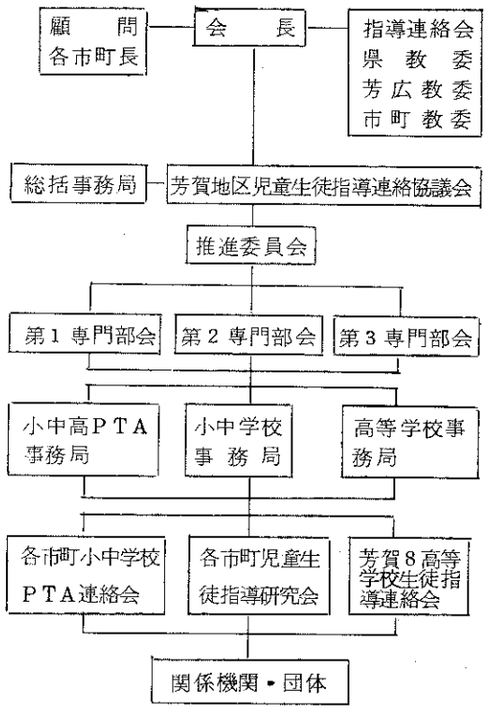
文部省から指定された研究の意図や本県の考え方を基調にし，芳賀地区児童生徒指導連絡協議会では研究主題を次のように設定しました。

「児童生徒の健全育成を図るために学校・家庭・社会が連携し，地域の特色を生かし非行抑止力を育てるにはどうしたらよいか。」

4.　研究主題のとらえ方

非行抑止力の力とは，日常生活における基本的行動様式をはじめとする道徳的実践力であり自己実現へのエネルギーであるととらえました。そして，その力の蓄積は，たとえ地域社会の変貌があっても，そこに住む人々の英知と努力によって培われたその土地の教育力の裏うちがあってはじめて可能なのであります。この抑止力をどう育てるかが研究の中心主題であります。

5.　児童生徒指導連絡協議会の組織



図示した組織の中で，本研究推進のため計画立案及び実践の中核となるのは3つの専門部会です。

6　活動の概要

(1)　第1専門部会

この専門部会の主な活動内容は，次のようなものです。

ア　児童生徒指導に関する広報活動
- 会報の発行（3か月に1回発行）
- 各市町発行の広報紙への寄稿
- 各学校PTA機関紙への寄稿

イ　実態の把握と分析
- 生活意識調査
- 性意識調査
- 環境実態調査

ウ　児童生徒の健全育成にかかわるポスター標語の募集と配布

エ　中間報告，研究発表に関すること

オ　先進地域視察等の計画と実施（第1回，昭和58年1月実施予定）

カ　推進委員会，専門部会の運営に関すること。

(2)　第2専門部会

この専門部会は，各学校の児童生徒指導と直結する活動内容を取りあげ，研究を推進する部会である。その主な活動内容は，次のようです。

ア　基本的生活習慣の徹底
- 「オアシス」運動の推進
  - ㋔ハヨウ　・㋐リガトウ　・㋷ンセツ　・㋦ミマセン
- 生徒心得の検討と実践化の工夫

イ　「耐生づくり」の強化
- 小中高が同じ意識で取り組む
- 「耐生づくり」に関する事例研究の推進

ウ　教師と児童生徒の好ましい人間関係の醸成
- 児童生徒との共通，ふれ合いの場の設定
- 日記指導の推進
- 「教師と児童生徒との好ましい人間関係の醸成」に関する事例研究の推進

エ　指導体制の確立
- 各学校の指導体制の確立
- 幼・小連絡会
- 小・中相互訪問
- 中・高相互訪問
- 高校間の連携強化

(3)　第3専門部会

この専門部会は，家庭や地域との連携を図り，児童生徒の健全育成への啓蒙と実践的活動を促す機能を持った部会である。その主な活動内容は次のようです。

ア　代表者と語る会の実施
- 青少年の健全育成に関する諸団体，各機関の現状分析と連携の在り方

イ　「あいさつこだま運動」の推進
- 従来の運動を更に強力に推進する。
- ポスターの募集と優秀作品の印刷配布

ウ　講演会の実施
- 各小中高PTA連絡協議会と共催で実施し，健全育成への関心を高める。

エ　小中高PTAの事例研究会，意見発表会

オ　合同補導の強化

カ　健全育成ステッカーの店頭貼付

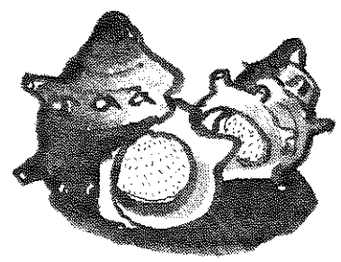
キ　ボルノ等不良雑誌自販機の追放運動

ク　環境浄化重点地域の指定

ケ　大型店舗との話し合い（万引対策等）

コ　制服販売業者との話し合い

以上児童生徒推進地域の指定を受け，今日までの活動の概要について，専門部会を中心に紹介をいたしましたが，まだ計画中のものもあり，今後更に学校，家庭，地域社会に根をおろし研究を進めて参りたいと思いますので一層のご指導とご協力るお願いいたします。



昭和55・56年度文部省指定生徒指導研究発表会を終えて

足利市立西中学校長　塩　田　富　吉

1　学校の概要

(1)　学級数及び生徒数（56年度）

学級数　23学級（内特殊2学級）

生徒数 844名

(2)　職員数　男子25名，女子17名

(3)　学校及び地域の特性

足利市の西部に位置し，隣接地に桐生市，太田市がある。学区内は住宅地が大部分を占め，学区内の中央を旧一級国道50号線が東西に走り，交通量は極めて多い。

学区内には，足利工業大学，県立商業高校，昼間定時制高校，市営競馬場，住宅団地（2か所）があり，人口は急激に増加を示し，各地にアパートや新築の家屋等が増え，地域の協同体としての意識も薄く，協調性の欠除と共に，教育への関心の低調さが本校生徒指導上の大きな隘路となっている。

2　研究の概要

(1)　主題設定まで

本校では学校課題として，(ア)　基本的学習態度の確立（特に教科指導と生徒指導）

(イ)　学級経営基盤の確立（特に学級指導の充実強化）をここ数年来手がけてきた。

研究主題設定会議の折，学校課題を研究してきたのだから，学習態度の確立，を取りあげ，これを研究主題としよう，という声があがり，一応「やる気を育てる学業指導」を主題と決定した。所が学業の概念は教科だけにするのか，その為の組織はどうするのか等で議論百出，その結果，又ふり出しにもどることになった。共通理解といとも簡単に口にしている言葉ではあるが，真剣に取り組んだ場合，いかにむずかしいかをつくづく思い知った訳である。

そこで，生徒指導とは何なのか，を学ぶために，全職員で，文部省発行の「生徒指導の手びき」を読むことからはじめた訳である。理論研究と並行しながら，本校生徒の実態や地域の特性をよく知ろう。その中から研究の方向を見つけよう。これこそが共通理解であろうということになった。

ア　生徒の実態から

日常の諸調査，検査を通して，良い面としては「やや粗野であるが，明るくのびのびとしている。部活に熱心であり，体育，文化両面に渡って，かなりの成果をあげている。」等があげられる。改善点としては「自主的に計画し，実践する意欲に欠ける。規律ある行動がとれない。わがままで耐久性に乏しい。」等，現代の中学生全般に見られる傾向と全く同じである。このような実態に目を向け，意欲的に積極的に日常の活動が営めるような生徒を育てていきたいものと考えた。

イ　地域の実態から

前述の如く生徒を取りまく環境は，この10年間に著しい変貌を遂げつつある。顕著な例としてあげるならば，アパートや貸家の乱立，酒，煙草，不良雑誌等の自販機の増加，風紀上好ましからぬ飲食店，ゲーム場等の増加等枚挙にいとまのないのが実態である。

近年環境浄化の運動も漸次活発化しつつあるが，生徒指導の視点から，こうした地域の中で正しく生き抜いていく為に，誘惑に負けぬ強い精神の育成が求められるものと考える。

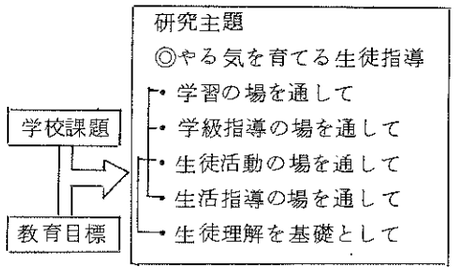
ウ　教育目標から

当然のことながら，教育目標具現化の中で，生徒指導のはたす役割は大きい。学校教育活動全体の中にとけこんだ形として行なわれるべきである。それらの活動を続ける中で，ひとりひとりの生徒が，意欲をもって取り組めるような配慮をなし，相互の触れ合いの中で，たくましい人間として，望ましい生き方が出来るような指導に努めることが真の生徒指導であろうし，ひいては教育目標へ結びつくものであると考えられる。

学校の教育活動をより高めるためには，生徒自から伸びようとする自覚ーやる気ー意欲ーが必要であろうと，情報化時代の中で生きぬいていくためにも，「やる気を起こす」資質や態度を育てていかねばならない。それらの具現化のために，教師と生徒生徒相互の触れ合いの場を多面的に設定すると共に，それらの設定場面を次のような5つの部門に分化させて，指導の実際に取り組んできた。

5つの研究部門と研究内容，研究テーマ等レールが敷かれるまで，1学期かかった訳である。

最初は試行錯誤の連続であり，総論賛成，各論反対等，いろいろあったが，レールが敷かれる迄は，出来る限り自由にのびのびと討議させるようにした。校長は何を考えているのか，と思われる位，じっと耐えることも必要であると痛感した次第である。



3　研究をすすめるための校長としての基本方針

前述した如く，職員に安心感や，研究の方向づけをすることは校長の責任である。

そこで，勤務時間内の研究であること，研究が終了する迄は職員異動はしない，校務分掌組織を生かした研究であることを骨子に次のような基本方針を打ち出した。

(1)　全職員が完全に意思を統一し，生徒のための研究にあたる（各研究部の内容を決める際，教育目標の具現化に視点を合わせる）

(2)　生徒の実態に即した研究であること，（長所を伸ばし，短所を矯正する研究であること）

(3)　生徒指導を単なる非行対策という，狭義の考え方をしない。

(4)　生徒も共に考えていくという体制をつくりだしていくこと。

(5)　PTAや他校との関連をはかりながら地域全体の教育的関心を高めようとする研究であること。

(6)　研究の結果を期待するのではなく，その経過を重視する考えを持つこと（2年間で100点満点をねらおうとしない）

(7)　研究のための研究に終らぬよう息の長い，引きつづき継続できる研究であること，（ムラ，ムリ，ムダのない研究であること）

(8)　現在の組織をできるだけ活用し，毎日の教育活動のリズムをこわさぬよう配慮すること。

(9)　研究の効果判定が，具体的に測定できるような研究内容の精選に心がけること。

4　研究の成果と今後の課題

生徒側より見た場合，建設的意思が多く見られるようになったこと，学習は自分からという意識をもち，前向きな姿勢が見られること，父母の意識が高まり，協力体制が強まってきたこと等があげられる。

教師側としては，学年会や職員室での日々の話し合いの中から共通理解の基礎が生まれるようになった。又，生徒の姿を客観的にとらえ，理解しようとする生徒指導の原則が定着してきたこと等があげられる。今後の課題としては，敷設されたレールの上を，うまずたゆます歩むことにあると思う。発表をもって終ったのでなく，発表をもって新しく始まるのだという心を忘れず，師弟同行の精神で前進していきたい。

やる気を起こさせる生徒指導

～授業・学級経営・教育相談を通して～

宇都宮市立横川中学校
高　島　守　親

本校では，昭和55・56年度の2か年にわたり生徒指導の研究校として，宇都宮市教育委員会の指定をうけ，従来本校において実践してきた生徒指導をもとに「やる気を起こさせる生徒指導」の主題を掲げ，その実践研究にとりくんできた。
以下その研究の概要について述べてみたい。

1　研究のねらい

学級の生活で，小集団活動を活発に行なうことができる生徒を育成する（生徒指導を進めるのに学級は重要な場であり，そこで培われたことが，授業の場にも生かされるものである）とともに授業において生徒が学習のめあてをもって授業にのぞむことのできる生徒の育成をねらいとした。

2　主題のとらえ方，研究のすすめ方

本校では「やる気」を次のように考えた。伸びる根本原因はやる気である。やる気は，生徒自身が，自ら「やろう」「やりぬこう」とする内発的な欲求であり意志（意識）である。これは自己実現の欲求のあらわれでもある。この意味で生徒はやる気をもっている（実態調査の「進路」の項に現われている）。この自己実現の望みをよりよい状態に発露させるため，生徒指導は，学校における教育活動の全領域を通じて適切な援助・指導が行われるが，本校での研究は，次のようにしぼって行なった。生徒が，学校生活の大半を費す授業が意欲的に行なわれるようにすること，本時で何をするのか，どんなことがわかればよいのか。学習にめあてがもてることを中心に研究をすすめた。そのためには望ましい学級集団が必要となる。学級で小集団活動を活発にさせることによって，学級でもやる気を起こさせるとともに，それが意欲的な授業へとつながっていく。学習のなやみとか，友人間のトラブルとかをはじめとして，全生徒により望ましい方向への援助をするために教育相談を積極的に進めた。さらに，これらを支えるものとして，体力づくり，生徒会活動，生徒の手による学級対抗の球技大会，奉仕活動，勤労体験などの各種行事をとり入れ，やる気を起こさせそうと試みた。言うまでもなく，人間は全人的に発達するものであり，心と体の健康がやる気を促進させる基盤と考えたからである。

3　研究内容

(1)　学習意欲を起こさせる生徒指導（授業部会）
　①　その時間に何を学習するかをわかるように毎時毎時の学習計画表の作成
　②　授業に小集団活動をとり入れるための研究
　③　教科における生徒指導上の配慮事項等の考察，及びわかる授業のための授業研究会の実践

(2)　やる気を起こさせるための小集団活動（学級経営部会）
　①　小集団編成と努力目標の設定
　②　小集団の生かし方の手だて
　　・話し合い活動を活発にする方法　・リーダーの養成　・係り活動を活発にする方法
　　・不適応生徒の指導
　③　情報の収集
　　・生活記録，班ノートの活用，指導

(3)　やる気を起こさせる教育相談（教育相談部）
　①　ＰＣＬ欲求不満調査（実態調査）
　②　計画的教育相談の実施－チャンス，呼び出し，定期，自主来談，事例研究会など

4　各実践例（略）

5　研究の成果（紙面の関係で一部のみ）

(1)　生活態度もよくなり，自主的な生徒活動ができるようになってきた。それと同時に授業における学び方（学習の手順）がわかるようになってきた。

(2)　全校一体になっての研究体制から，授業・学級経営・教育相談の部会において，研究に対する熱意がみられ，教師自ら意欲的な実践の態度が生まれてきた。

ＰＴＡ活動で学んだ中学校の生徒指導

喜連川町立喜連川中学校ＰＴＡ
清　水　　栄

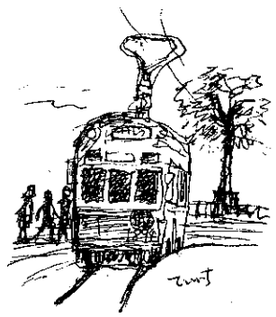
研究ＰＴＡ「親と子のふれ合い」を実践して，私は青少年の健全育成の重大さと難しさを痛感しました。今年の総理府の青少年白書を見ても，校内暴力や家庭内暴力事件が激増しています。
その原因はいろいろありますが親として考えさせられることは，親の養育態度についてでした。問題行動を起こす少年の性格・態度は，「わがまま」「忍耐力がない」「反抗的」が最も多いと報告されています。そして親の養育態度として，母親では「溺愛」と「干渉」が多く，父親では「拒否」「期待」が目立つということでした。また生活の基盤である家庭も円満に運営されていない実態がうかがえるとのことでした。

喜連川中学校ＰＴＡ指導部でも，地区別三者懇談会を開き，家庭生活について，親子で話し合った記憶が蘇ります。指導部として計画した内容が重要であり，今後も続けていかねば解決できない問題であると考えています。子を持つ親として，一体何から始めるべきか，真剣に今こそ取組むときだと考えています。ＰＴＡ会員の中にも子供をどのように扱ってよいのか，ときどき迷うことが多いとの声が聞かれます。いかに子供との対応のしかたが難しいか，反省させられます。

甘やかし，過保護，過干渉が非行の原因と言われていますが，親子で真剣に話し合ったことが何回あったでしょうか。子供に教えるべきことをどの位話し，心を育てる鍛錬をしたでしょうか。大きくなれば分るとか，忙しいからということで過ぎてしまい，中学生になってから，急に態度が変るのでは，子供も素直について行けません。

私達は子供を理解する努力が必要だと考えています。年に一度は父親も子供の学校生活を知るため，「父親学級」を開いて工夫しています。現代の青少年の多くは，「自制心が欠如している」とか「不平不満が多いとか言われます。そして辛いことや自分が気に入らなければ簡単に投げ出してしまうなど，問題が多くあります。しかし本気になって我々親は叱り，こうするのが正しい社会人になることだと，話してやることが出来たでしょうか。どちらかと言えば，うやむやにしてしまったことが多いと思います。難しいが大事なことだと思います。だからこそ，ＰＴＡ会員が一人一人本気になって，協力し，本音を出し合って話し合い，研修を積んでこそ，成果が上がると信じています。

ＰＴＡ指導部の活動は，子供が素直に，何の不安もなく，学校生活ができるよう，家庭の役割や子供の生活感情の安定を図るよう，親の連携を進めています。自分の子供だけでなく，他の子供も同じように指導してこそ，効果が上がると考えています。これは子供達がよく言う「みんながやっている。」ということで甘えや言訳をする原因をなくすることにもつながります。
子供を育てるためには，大人の責任において協力しなければ出来ないことだと考えています。そして同じ境遇にあるＰＴＡが率先して活動すべきだと思います。世の中の厳しさは，他の親によって教えられ成長していくので，自分もまた，他の子供に教えてやる義務と責任があると思います。
私も指導部の一員として，お祭や校外の指導に出たとき，中学生にはふさわしからぬ服装が見受けますが，これも親として考えなければと思います。
また先生方には子供が楽しくわかる授業を進めて下さる様，切にお願いし，子供達の教育に一層情熱を傾けて頂きたいと思います。親も子供が真剣に学ぶよう指導していきたいと思います。



校長と学校図書館

塩谷町立大宮中学校
江　連　栄　一

学校図書館は学校の一附属施設でなく学校教育の中心的位置にある。学校図書館に対する従来の見方や扱い方を改めて，これに新しい位置を与えるためには，何といっても，校長が学校図書館について深い理解をもち，学校経営全体の上から，これをそのあるべき姿におくように考えることが根本の条件である。

すなわち校長は，学校図書館を学校経営の中枢に置き，その心構の施設として正常の予算をもってこれの経営に当たり，図書館の組織や運営に対して，激励と助言とを与えることに努めなければならない。

また，監督や支援の立場にあたる人々に対しては，たゆまざる援助と理解とを求めなければならない。…… 将来の発展拡大に応じられる計画性・統一性をもってこれに当たること，外見上の形式や美しさを整えるというのでなく，教師のためには教師の，生徒のためには生徒の，好ましい読書環境がつくられ，教養への活動が促進されるようにあくまで運用上に重点を置いてその経営にあたることなどの諸点に特に留意して督励すべきである。（昭和23年・学校図書館の手引　文部省）

校長の学校図書館に対する理解と熱意と指導助言とが学校図書館の運営に影響する面は極めて大きい…… 校長に望まれる事項をあげてみる。

ア　校長は学校図書館の教育的意義を深く理解するように努める。

イ　校長が判断・決裁するにあたっては，各種の資料や情報を検討するように努める。
科学技術が革新された現代社会において，客観的に広く，しかも先を見とおした判断をするためには，管理者自らが資料や情報を活用する態度をもたなければならない。

ウ　全校職員に，学校図書館の運営について理解させ，それに積極的に協力するよう指導助言する。

エ　司書教諭または係り教職員を指導助言し賞揚するように努める。

オ　校長自身がよい読書人となり，利用者となり，自己研修に励むように努める。

（中学校における学校図書館運営の手びき　昭和47年　文部省）

以上，二つとも学校図書館の手びきにある校長と学校図書館の項にある抜粋である。

昭和22年度に新学制が施行されたときに運営の指針では，学校図書館の設備について，新制中学校，新制高等学校は位置からみても設備からみても係員の組織からみても学校教育に最もよく寄与し，どの生徒にも利用されるに適した学校図書館を備えなければならなかった。

そして，昭和28年に学校図書館法が施行され学習指導要領では常に利用指導が配慮事項に述べられてきている。

このことについては学校経営に当る者として，それぞれの立場で方策を構じてきているわけであるが，私としては自己反省として紙面の多くを使い記載してみた。

現在，情報化云々と情報に対する諸問題・読書離れの傾向と不適図書への接近の問題等，中学校のかかえる問題点が多く，また，中学校への期待も大きい。このときに当たり，何から手をつけたらよいのかとまどいが多くなる。

学校図書館が旧来の図書館であってはならないだろう。情報の蓄積と利用の方法も，また生徒の読書という行為に対しての変革への期待も科学的社会の革新の時代とは云え，社会の変動に対応することが忙しいと言っても，人間形成をめざすものとして，言語・文字という文化は特定の者のものでもなく遠い未来のものでもなく現実に毎日毎日ひとときも離れない身近かなものである。したがって，自らが読書人であることの一歩から自覚せざるを得ない。

雑　　感

宇都宮市立横川中学校
高　島　守　親

☆　とっさの判断

生徒が，ガラスなどを破ったとき，指導にあたった先生が，どんな言葉をかけているか。第一声に「けがしなかったか」と言ってくれる先生は，すばらしいと考えている。そんな言葉をかけてくれる先生に対しては「弁償すればいいんだろう」なんていう子は育たないと思う。とっさの間に口をついて出る言葉や事態に即応する行動ほど，その人の人間性や能力を，正直に表わすことはないように思う。校長（教師）たるものは，即座に判断し，適応して，しかも本質を見失わない言動ができるようでなければならないと考えている。

☆　仕事（問題）を見つける

私は，よく茶のみ話に，仕事は「早くよし，ちようどよし危うし，遅し悪し」の心がけで当たることの重要さを話す。仕事（問題）をみつけ，それを追いかけるようでなければならないと思う。仕事（問題）を追う姿勢は，日々真剣に自分の任務を堀りさげて追求しつゞける，校長（教師）のあるべき姿を求め続ける心に通ずるものと考えている。

☆　足音で授業の成否がわかる。

私が，一条中の教員であった頃，今は亡き黒田邦博校長先生に，6年間程仕えたことがあった。黒田先生は，私たち若い教師にとっては，なにか威厳を感じ，話すにも緊張を覚えたものだった。

先生は，よく職員室にこられては，職員に気軽に話しかけられたが，それがまた，自分の実力を試されているように感じられた。先生は，「教師の足音や表情で，授業の成否はわかるものだよ」とよく話されていた。

心の動きが，そのまゝ自然に足音に表現されるうれしい時の足音，憂うつな時の足音，健康でない時の足音 … が，微妙に響いて伝わってくるとのことである。〃足音で授業の成否がわかる〃そんな校長になりたいと努力しているのだが…。

研究会余聞

河内町立田原中学校
吉高神　猛二郎

「小学校で良い子が中学生になってどうしてあんな悪いことをするのでしょうね」

さきごろ，ある研究会の帰途，列車内で愛媛の体育科教員が開口一番嘆いた言葉である。愛媛ではへき地小規模校での新卒教員に対する嫌悪はぬぐいきれないが，彼は大卒後6年間へき地勤務を経ていまは児童数千名程に膨れ上がった小学校に勤めているとのことであるから40才前後と見受けたが，愛媛でも数は少ないとは言え子供たちが暴力沙汰に及んでいるのは「ご多分に漏れず」であると言う。新聞では「社会問題の中でも難問中の難問」とし，アメリカのすさまじい校内暴力の実態を伝え，総理府調査では欧米各国における深刻な少年非行の状況，対策調査報告を発表していると彼は語る。前夜，他県の教員と「おそくまで語り合った」とその熱のさめやらずの姿であったが「豊かさの中で育つ子供たち」「遊び仲間に年令の上下なく」「小家族の甘えん坊」「こましやくれた理屈をこねる小さなおとな」何が悪い？「家庭であり学校である，親だ教師だ」となる。今年の春，警察の警備下で卒業式が行われた中学校がいくつかあったと聞く「学校と警察が緊密な連絡をとりあって事件を未然に防げ」と言う。しかし子供のやることはまわりの心づかいによってはだれもが直る一過性のものを多分に含んでいるのではなかろうか「非行の低年令化」と騒ぐがおとなが何らかの形で教えているからだ，為政者（論理などはどうでもよい「名文句」のある弁舌の持ち主）を含めた，おとなたちの責任ではあるまいかと彼の言葉はなかなか厳しい。愛媛の小学校では，よき集団の醸成をめざして3泊4日の宿泊訓練を行い，所によってはＪＲＣにより他地区の家庭で生活させ人間的つながりを深めようと努力していると言う。列車内1時間余の雑談であったが，終りに彼は学校給食で週2回の米飯はあるがパン食のために「腹持ち」悪く体育授業がつらいので，児童に嘘をついて自宅からゴハンを持参するのだがとこぼしていた。研究会後の一こまを記す。

雑　　感

K子のこと

かれこれ30年前のことである。戦後の混迷期，「野球ばかりが強くなる」子供たちは裸足で校庭を駆けずり回っていた。職員室の雰囲気はゆったりとしており，なかにはボナンザグラムに熱中する者，読書を事とする者，碁将棋を争う者たちの声，にぎやかであった。教科書は薄っぺらでも授業には食い付いて来て，飲み込みも早く，怠け者はいたにはいたが，おゝらかで言い付けはよく守る子らであった。私たちにも解放されたような生活に，熱と若さが燃えていたのかも知れない。

同僚と語り合い，異った小学校からの生徒は「いもの子を洗う」ように磨き合わせる要ありとして，毎年度学級編成替えを行なった。これで困ることは，家庭に何かの問題がある子を3年生になって初めて担任することである。それさえも若さで押し切った嫌いはある。

K子は私にとってそれに該当する。

学校地区の大半は，私の出身小学校地域であった。K子の隣家には後で牧師になった学友が住んでいたこともあって，家庭事情に多少通じている積りであった。

一学期は担任学級にもこれということもなく済み，夏休みも終り，新学期である。真黒に日焼けした顔，顔，その中にK子の顔はない。欠席の連絡もなかった。暑さにでもやられたかと軽い気持で帰宅途次に訪問した。留守である。
あすは出てくるだろうと安易に考えた。だが翌日も姿は現わさなかった。早速出向く，祖母がいてどこに行ったか判らない，探しようがないとの応接である。何か隠している気配もある。世馴れした老婆の舌のまわり具合い，要領を得ずに帰った。

K子の空席を気にしながらも，行事に追われ半月ほどすぎ電話がかゝって来た　家庭に連絡がつかないから引取ってもらいたい　警察から名指しであった。小使さんの自転車を借りて飛んで行った。ちょうど昼どきでもあったので警察の傍の中華そばやに連れて入り，そばをすゝりながら学校へ出ることを約束し別れた。私の期待はむなしかった。家にも戻らず，仲良しの友に一言の伝言もない。杳として消息不明，私なりに八方に手を尽くしたのだったが。

就職口を求めて生徒を引き連れ，東京，横浜方面に回り，進学相談の目まぐるしさのうちに冬休み。年はあけた。

新しい気分での始業式後ほどをへず，検察庁から参考人としての召喚状　取調べは型通り。
K子は，夏休みにどさ回りの芝居を見物，はねた後，役者のサインを求めに楽屋に入り，そこで犯されてしまったという。堕ちるのは早い，「売春行為」である。ほがらかで，気さくに誰れにも話しかける気の好い影はもう無い。おとなびて係官と連れ立って行く後姿を見送るばかりだった。
近所に住んでいた可愛い子チャンが米兵と仲良くなり海を渡った当時でもあった。

近頃，女生徒の中には，芸能雑誌などに載っている人気歌手の歌謡大会に，同級生を誘い合って東京あたりに気軽に出かけるのを間々見受ける。

一生を台なしにしてしまう間違いがなければと案ずる。登下校時に襲われる例もある昨今であり，高校に折角進学しながら，男関係で身を誤り退学し，目が覚めて立ち直ろうと苦しんでいる者もあると聞く。きらびやかな消費文化の中で自分を見失はない力を子供らにと願う。

編　集　後　記

- 「装いを新たに」と寺内秀男会長の題字を掲げた本誌55号は生徒指導を特集している。
- 会員外の方々に寄稿を願ったところ，芳賀地区小林茂教育長，清水栄阿久津中ＰＴＡ会長のおふた方が玉稿をお寄せ下さった。貴重なるご意見を生かして戴きたい。
- 図書館教育については「地道な研究」をとご寄稿を願ったものである。
- 毎年のことながら，気忙しい卒業期である。ご健闘を祈る。